
この歌にのせて...

闇鍋プリン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この歌にのせて…

【Nコード】

N3085F

【作者名】

闇鍋プリン

【あらすじ】

先輩の暴力事件、顧問の休職などで、やる気なくなった大川西学園ミュージカル部。佳風もそのひとりであった。だがそんな佳風もとに、新入生、茂樹が尋ねてくる。生意気な彼の、ミュージカルがやりたいという熱意に心動かされた佳風は……

第一章 青い春は今しかない 第一話 風

第一章 青い春は今しかない

「なんだって男子校なんか選んだんだろうなあ、最悪なのに」

大川西学園男子高等学校、入学式。

「そりゃあ部活とか、なんとか」

「ウチ、野球部以外そんな活躍してなくね？」

「彼女出来ないような奴が集まってるから、ムサくて嫌だよな。ま、俺は彼女いるけど」

「うわー」

「死ねー」

「くさー」

「くさーってなんだよ」

「美形揃いの男子校なんてありえねえし」「夢見すぎ」

「でも、一昨年の“ミュー部”の三年はやばかったよな。俳優、アイドル、モデル……なんでも揃ってる感じ」

「そっぴいやヴィジュアル系みたいのもいたね。なんつつたっけ？マサミチ先輩？」

「おかげで、中学の女友達が騒いでたよ。あんたの学校美形揃いっつて。ミュー部にムサ男が入れないのはそのせいだな」

「んでもさあ……顔はよくても結局は男なんだよなあ……。……で、今はなにやってんの？ ミュー部は。マスヨシ」

第一話 風

柔らかく暖かい陽気。

とつても眠くなる季節、春。

そんな中での入学式。広い体育館では全校生徒約五百人^{プラス}＋その保護者で、密度は相当なものになっていた。保護者席は満員列車並。冷房が利いていない上に長ったらしい校長の挨拶。その後の新入生全員の呼名。退屈なことこの上ない。立ちっぱなしにされて足も疲れてきた。だから、紛らわすために寝るか喋るかぼーっとする。それが良い。

マスヨシこと増山^{よしかぜ}佳風の周りには、圧倒的に喋っている男子の方が多かった。佳風的には、ぼーっとしたいのだけど……

「なあマスヨシ？」

「うるせー。……ミュー部はもう終わったの。少し黙れお前ら」

冗談っぽくあしらってみた。ここで瞼を閉じ、会話を強制終了させる。

「んだよつまんねーなあ」

言いつつ彼は、他の男子と喋るのだが。

(……)

ただ、佳風は、立ったまま本当に寝るといふ技は持ち合わせていない。だからどうしても考えてしまう。

ミュー部のこと。

「……」

もう、終わりなんだよ……。

「……うた。十三番、時田^{ときばし}茂樹」

「はい！」

高い声だなあ……。佳風は、そんなことを思いながら時間を潰し

ていった。

「十四番、富沢瑛太。」

十五番、……………

式が終わればすぐに帰れる。それが入学式の日の良いところ。
なのに、何故か今日は色々と邪魔されることが多い。

「マスヨシ、新一が呼んでる」

「はあ？」

中学のころの後輩でも入ってきたのだろうか。

若干面倒だと思いつつも、やはり気になる。鞆を肩に引っ掛け、
廊下にひよいと顔を出した。

「……………」

だが、知らない顔だ。

「えっと……………」

頭一つ分小さい背、サラサラした黒い髪、大きい瞳は少しつり上
がり、真っ直ぐにこちらを見上げている。

純粹というより、生意気そうな印象を受ける雰囲気だ。

「増山先輩ですよ」

ハキハキした高めの声。

「（どつかで聞いたことあるかも…………？）うん」

目の前の少年は、元気で、とても生き生きしているように思える。
眩しい。そしてその口角のあがった口から発せられる明るい希望。

「俺、ミュージカル部に入りたいです！」

「……………」

こいつ……………」

「この学校が第一志望じゃなかったですけど、もし落ちたら、ミ
ュージカル部入ろうと思ってたんです。俺、先輩みたいになりたい！」
ミュージカルがやりたい。その熱意が、前の自分によく似ている。
それにまた腹立つんだ。

しかし、喉元でぐつと堪えた。キレる場面ではないし、そんなに短気なわけじゃない。

「名前は？」

「時田茂樹」

「うん、時田。ミュージカル部なんてやめときなよ、みんなやる気ないから」

「なっ……」

突き放したつもりだったが、茂樹は向かってくる。

「去年の三年生の暴力事件ですか？ そんなのどうだって良いじゃないですか」

「どうだっていい。だが、」

「どうだって良いことだけど！」

佳風は声を荒げてしまった。

予期していなかったため驚く茂樹。

佳風ははつと溜め息をついて冷静になった。「……問題は、それだけじゃない」

「……は？」

茂樹は佳風の憂いを帯びた瞳にたじろいだ。恐る恐る顔を覗くと、キツと睨まれた。

「熱意は結構。でもそれだけじゃダメなんだって」

「そう言い残してさっさと行ってしまっ」

「待って先輩！」

茂樹はその背中を慌てて追いかけた。

「先輩とっても良い声してんのにい！ 俺、ちょっと憧れてんだよ！」

「（ちょっとかよ）ありがと」

「んがっ」

急に立ち止まったので反応できずに、茂樹は彼の背中に激突してしまった。

「ふいまへん……」

地味に痛い鼻をさする。

肩にぽんと手が置かれた。

佳風は、まるで幼児をあやすように腰を屈め、目線を合わせる。

「少し生意気だな」軽くデコピンをかましてやった。

「茂樹クン」

なんだか、申し訳ない。

こんなに言ってくれるのに、裏切ってしまつて。

「……」

佳風はそのまま歩き出した。茂樹はデコピンを食らった額をおさえつつ、じつと背中を見送った。

茂樹は当然、諦めてはいなかった。

この学校に来たのなら、ミュージカル部に入らなければ意味がない。

「俺、入部します！」

彼はあろうことが、あの部長に食ってかかっていた。

「うつせーなあ」

スペシャルウルトラ短気の、野川タケルに。

今日から一週間は体験入部週間で、部として登録されている団体は放課後、最低四時まで残らなければならない。

サボる団体が数多い中、ミュージカル部の数人は律儀に顔を出している。

野川もその一人。だが勝手に苛立っている。サボれば良いものを、その不機嫌丸出しの形相に、茂樹も少ししたじろいだ。

「うちの部は今年で廃部。だから入っても意味ねえよ」

最近短くした髪の毛をガリガリ搔く。彼はイライラするといつもこうだ。だから部員は、これを捉えたらとりあえず黙る。

だが最近入学した一年坊主には、彼の癖は当然分らない。

「どうして廃部なんですか？」

イライラ。

「野川先輩」

イライライライラ。

部室の空気が、徐々に緊張していく。

ふたりの視線がぶつかり合い、非科学的な火花まで散りそうである。

野川にしては、我慢している方だ。切れ長の目は鋭さを増す一方だが……。

「ああ、ちよつと、し、茂樹……」

マヌケに介入した佳風。

「なんですか」

「お前の気持ちも分かるけど、俺も昨日言っただよな？」

「……」

「……？」

「そうでしたっけ？」

とぼけてみせる。

（野郎……！）

一発くらい殴ってやろうかと思ったその時。

「やりましょうよ」

一転して、明るい口調で茂樹が言った。

他の部員の視線が、一挙に彼に集まる。

「みんな、やりたいんでしょ？ だから集まってるんでしょ？」

誰も答えない。自問自答の繰り返し。青臭い台詞を吐く茂樹を、

誰も笑ったりはしない。

「十一月の文化祭までまだまだ時間があります！ 俺、先輩達とミュージカルやりたい！」

佳風は、なんだか、胸が苦しくなるような思いだった。首を縦に振りそうになる。だが

「うるせえよ一年！」

野川がブチ切れ、茂樹に掴みかかろうとする。それをすんでのところで、

「やめてよタケル君！」

副部長の川野光太郎が止めた。

タケルとは対照的に、ほっそりした柔そうな男。髪も長いし、肌も白い。かつこつけている訳ではなく、彼そのままを表している感じだ。

彼に止められ、タケルは急激にクールになる。光太郎に止められれば辞める。彼らはずっと一緒の幼なじみ。

「……光太郎のアホ。止めんな優男、俺にストレスが溜まんだよ」
だがタケルはそう言い放ち、光太郎を突き放す。光太郎がしゅんとしてしまう。部を支えていたふたりがこうだと、全体も気まずく落ち着かなくなる。そんな空気をぶち壊す男がひとり。

「んままま、お二人さん、喧嘩は良くないなあ」

「絃さん……」

三年の小椋絃。ボサボサに見えてしまう癖っ毛の持ち主。

「るせえな絃爺！！ 黙れブアーカ！！」

「最近の若者は切れやすいって、本当のようだねえ……悲しい悲しい」

演技のような身振り手振り。

「だいたいなあ」

彼の一挙一動。淡々と、針のような言葉を紡ぐ。

「やりたくないなら、さっさとみんな退部届出しゃいいんだよ。つたく、グダグダしてるからみんなイライラすんだ」

それには皆、ピクリと反応する。絃がわざと言っているようにも思えた。

「じゃあ、絃さん先輩はどうしたいんです？」

生意気な口調で、茂樹は試すように彼を見据えた。彼も、それに答えるかのように、ニヤリと笑う。

「どうしたいも何したいも、顧問がいなきゃ無理だから、どうせダ・

メ！」

「」

「今年中に顧問が復活しなきゃ活動停止。誰も俺達の顧問になる奴いないし」

「そんな……」

「暴力事件あったでしょ？先輩がよその学校の奴襲ったの。あんなに、教育委員会のお偉いさんの娘の彼氏がいたんだと。それ以来ウチを結構監視してるらしい。去年、文化祭で公演出来なかったのはそのせい。後輩はガバガバ辞めていくわ、形見は狭いわ、唯一庇ってくれた顧問も事故で休みとなりや、やる気なくなるだろ？」

「……」

顧問が付かないのは致命的だ。

「んーま、みんなが辞められないのは、顧問に後ろめたさを感じてるから、かねえ」

「……」

茂樹は黙ってしまう。こんなに問題を抱えていたとは、知らなかった。胸の内の情熱が密かに冷めていくのがわかる。そうか。ここ先輩達の火は、もう消え……

「やっぱやる……」

皆、各々、

「え？」という反応をし目を丸くした。佳風は、自分でも何を言っているんだろうと思った。「ごめ……俺空気読めてませんね……けど、やろうぜ、やっぱ」

「先輩……」

「部活動としてじゃなく、有志で良いんですよ。それじゃ顧問もいないし。……先生に後ろめたさを感じてるくらいならやりましょうよ！先生に」

見せたい、まで言わせてもらえない。野川が遮る。

「見せらんないだろ！？ 意識ないんじゃ！」

意識がない？

「どういことですか？ 先輩」

茂樹が佳風に問う。佳風は次第に悔しくなり、その視線から逃げた。そつと光太郎が答える。

「大変な事故だったんだよ……そういうこと」

また部の空気が暗くなった。

光太郎の静かな声が鳴る。

「でも、きつと目は覚める。だから……僕もやりたい」光太郎は申し訳なさそうにタケルを見やる。

「タケル君……」

タケルの表情は厳しい。

「なんだよ、俺がどうするかって？」

「……うん……」

「……」タケル君、もつかいやろうよ。お願い。僕はタケル君がいなきや嫌」

この恥ずかしい台詞にタケル以外の全員が密かにキュンときた。光太郎は部では完全に女扱いである。男所帯に咲くか弱き白い花。そのため、どうしても必要となる女性キャラは一挙に彼が担う。話を作るのは顧問なのだが、最近の作品ではわざと女性を登場させているのではないか、という疑惑が残ったまま。

「……お前なあー!!」

野川は恥ずかしくなつて顔を両手で覆った。これも野川の分かりやすい癖。そのまま机にガンと肘を付き、そのまま崩れる。

「ご、ごめんねタケル君！」

「うるせえ!! いつまでも女々しくしてんなよ!!」

「ごめん……」

「だからなんですぐ謝るんだ！」

「う、ごめんなさい……」

「あーもう!!」

野川は顔を上げた。興奮していて顔が真っ赤である。

「分かった！やるから、泣くなよ！」

「う、うん！やった、ありがとうタケル君！でも僕泣いてなんか……」

「やったな、先輩！」

茂樹が佳風の肩をポンと叩いた。

「生意気なんだよてめえは！！」

グリグリとこめかみに拳骨をねじ込ませる。その時、

「あー……俺も参加するーよ？」

今までじつと黙っていた、三年の滝邑介。部で一番背が高く、唯一のメガネ。

「タキオン先輩いたんすか……」

佳風がサラリと吐いた暴言にも反論はしない。

「あの、絃さんは……？」

「マスヨシが久しぶりに熱いもんだから、仕方なしにやってやろうかなあー」

これで六人。茂樹は足をバタバタさせて喜んだ。

「よっしゃー！！みんなサン、ありがとうございます！！」

「でも人数が……」

「光ちゃん、若人がそんなネガティブになっちゃあいけませんよー」

「よし。もう一回、みんなを集めよう」

佳風が言くと、みんなしつかりと頷いた。佳風が言くと、みんなしつかりと頷いた。

「待つて先輩！」

帰り道、後ろから茂樹の声がした。が、止まらずに歩く。むっとして、やっとこさ追いついた茂樹。

「なんだ一年坊主」

「一年坊主じゃねえよ！ みんな俺のことシゲって呼んでる」

「ほうかほうか、時田君」

「シゲ！」

「分かったシゲ」

茂樹は満面の笑みを見せた。

「ところで先輩、脚本と音楽出来るんですか？」

「なめんなアホ」

先生には及ばないかもしれないけど、と断って、佳風はそれを引き受けた。

「尊敬してますよお」疑いたくなるような言い方。

「だって、先輩があそこで言わなきゃさ うん。……俺もちよつと諦めちゃってたし……ははは……」

佳風は思った。

「全部お前のおかげだよ」

「え？」

「だから、お前のおかげ」

そう。茂樹がいなければ、ミュージカル部は死んだままだった。

彼が追い風となり、息を吹き返したのだ。

「なーんだ先輩、よく分かってんじゃない！」

言っというて恥ずかしくなり、顔を背けた。

「調子に乗るなよ？ お前が一番下なんだから」

「へいへい」

「部長はキレやすいから要注意。まあ、理不尽なこと言われたら光太郎先輩にチクれ」

「あの二人できてんスカ？」

「バカか」

「へへっ」

生意気で、ふてぶてしくて、突進しか出来ない不器用さと勢い。佳風に、それはなかった。いつも内に秘めているだけ。それも、さつきまでしょぼくれていた。

「……お前さ、嵐みたいな奴ってよく言われるだろ？」

「さあ……」

「自覚なしか。まあそれがいいよ、怖いものなしで」

「……」

「？」

じっと見つめてくる。

「……は？」

「先輩笑った！」

「」

「さ、雨が降る前に帰らないと」

スキップする茂樹。

「雨って……あ、コラ待て一年坊主！」

ふたりは人目も憚らず、ギャーギャーと騒ぎながら、駅へ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3085f/>

この歌にのせて...

2010年12月10日19時15分発行